

紹介

マーガレット・シュトロローベル著
(井野瀬久美恵訳)

『女たちは帝国を破壊したの

か——ヨーロッパ女性とイギリス

植民地——』

これまでイギリス帝国史の叙述のなかで白人女性が占める割合は総じて低かった。すくなくともその実態を全体的に示した日本語で読める文献はこれまで存在しなかったのではないだろうか。この一九九一年に出版された原著の翻訳書は、その欠を埋める貴重な仕事だ。

もしかすると邦題は、本書がテーマを相当限定しているのではとの印象を与えるかもしれない。そこで一言おきなおくなら、このタイトルには次のような根深い誤解を問い直そうという意味がこめられている。すなわち、帝国諸地域に赴いた白人男性は当初、現地人の間に分け入ってかなり協調的な関係を築いてきた。それが、白人女性の参入によって一変した。彼女たちは

現地でヨーロッパ社会を再現すべく排他的かつ人種主義的になるまい、同じことを男性にも要求しただけでなく、男性たちの白人女性保護意識をかきたてて、彼らに現地人を危険視させるに至った。そのため結果的に白人女性の流入をきつかけに、帝国支配は不安定化し崩壊してしまつた——。

このステロタイプとの対決が本書のモチーフであることは確かなのだが、もとのタイトル(『ヨーロッパ女性と第二次イギリス帝国』……副題に活かされている)にたがわず、内容はたんなる通説否定にとどまらず、きわめて包括的で、帝国諸地域で生きた白人女性たちのあり方と彼女たちの置かれていたコンテクストとが、限られた紙幅の中でみごとに伝えられている。

著者は大胆にもフィールドの設定という限界を最初から取り払い、サハラ以南のアフリカ諸地域およびインドをふくむアジア、そして太平洋の島々を俯瞰する。考察する時代も一九世紀半ばから二〇世紀後半までと広くとる。その上で、白人女性の活動に光をあてるのだが、なによりも画的でネガティブな白人女性像の転覆を目指す著者は、白人男性の妻、官僚、女医、看護婦、

旅行者、著述家、学者、宣教師、使用人、売春婦などの差異(しかもときにオーヴァラップする)に丁寧なまなざしを注ぎながら、地域毎の特殊性と共通性も勘案しつつ論を進める。同時に個々の現場におけるジエンダー、人種(白人と現地人のみならず混血人も視野に入っている)、階級の複雑な組み合わせや絡み合いも無視しない。そして婚姻(性関係)、社交(諸々の儀礼)、家政、政治(アンシエイション、論壇、フェミニズム運動、行政)、知(教育、学究)といった様々な問題領域における彼女たちの戦略や機能や実践を、数多くの事例を交えながら整理してゆく。これだけでも驚嘆すべき豪腕ぶりであるが、さらに、「女性も帝国建設の重要な参画者だった」あるいは「女性のあり方は多様だった」的な安直で無意味な結論で済まさない、ひとつの含蓄ある帝国社会像を描くことに成功している。

それゆえ、女性史、イギリス史、ヨーロッパ史、帝国史、植民地史に関心のある人のみならず、より実践的でアクチュアルな問題に取り組む人や、ポスト・コロニアル思想と格闘する人にも、ぜひ本書を手にと

ってもらいたい。専門性がきわめて高かったり、対象が絞られすぎたりする研究書や論文を読んでいるとういてい窺い知ることのできない多くのことを、大きなスケールの枠組みとその下で展開される歴史の裏に分け入るような興味深いエピソードの数々を堪能しながら、学び知ることができるはずである。また、今後この分野で研究しようとするなら、その議論が、シユトローベルの提示した全体の構図や多様な具体例のうちのひとつに回収されてしまわぬよう注意せねばなるまい。そのためには、巻末に付されている訳者井野瀬氏の批判的解説が必読。異論・反論を受けて立ち、論争を喚起する書でもある。

(B6版 二二八、二六頁 二〇〇三年九月)

知泉書館 二四〇〇円)

(監訳局作 川村学園女子大学専任講師)

ヒラール・サービー著 谷口淳一、清水和裕監訳

『カリフ宮廷のしきたり』

本書が執筆された一世紀頃、アッバ

ス朝カリフ権力は衰退し、イスラーム世界には諸々の独立王朝が成立していた。その中でシアア派のプロイフ家三兄弟の末弟アフマドがバグダードに入城し、カリフより大アミールに任じられ、ムイッズ・アッダウラの称号を授与され、スンナ派のカリフを擁護する代わりに支配の正当性を獲得し、軍事支配が始まった。このような時代において、ヒラール・サービー(一〇五六年没)はプロイフ朝宮廷に書記として仕え、カリフ宮廷と関わりがあった官僚であった。彼はニスバからもわかるように非ムスリムのサービア教徒(のちにイスラームに改宗)で、科学者や書記を代々輩出した名家出身である。本書はカリフ・カーイム(在位一〇三一一―一〇七五)の時代に執筆されたカーイムに献呈された。執筆された理由は、後世の書記の手本とされるようなアラブ世界を代表する書記であった彼の祖父であるイブラーヒーム・ブン・ヒラールから受け継いだ過去の「しきたり」やそれに付随する伝承が失われてしまうことを危惧したことによる。

全部で一七章で構成されており、各々の主題にそって宮廷にまつわる逸話が盛り込

まれ、宮廷において正しい振舞いとは何か、またそれが時代を経るに従ってどのように継承されたかを、ユーモラスな成功談や失敗談などを随所に取り入れ、具体的に叙述している。

まず序において神の代理であるカリフ・カーイムを賛美し、本書の執筆理由を説明する。

第一章「すばらしき宮殿」では、宮殿の広大さ、使用人の種類と数、豪華絢爛な装飾について描写される。使用人雇用経費、厨房や宴会の費用など膨大な金額の国家税収の予算表は、壮麗な宮廷の実態を窺わせる。浴場数で当時の人口を算出しているのも興味深い。

第二章「つとめの作法」、第三章「ハージブ職の規則としきたり」では、カリフ御前での各階級に相応しい作法、カリフの側近であるハージブ職の職務の内容と実態が、祖父から聞いた逸話や他の事例を織り交ぜて語られている。謁見の式次第についても詳しい。

第四章「カリフ達の着座、謁見における彼らの着衣、カリフ達の御前に加わる側近たちや諸々の階級の人々の着衣」では、カ